

外置と着地点

宗正, 佳啓
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6786980>

出版情報 : 九大英文学. 35, pp.57-80, 1992-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



外置と着地点*

宗 正 佳 啓

0. 序

本来一つのまとまった単位を成すべき要素が、外置 (extraposition) により二つの部分に分離され、以下のように、両者の間に他の要素が介入し不連続な依存関係が生じる構文がある。

- (1) a. An analysis has not been forthcoming that is not uncomplicated.
(relative clause)
- b. The assumption was questioned by only a few of those involved that Mary would reject the offer. (complement clause)
- c. The analysis of extraposition is more complicated for everyone than you would have thought. (comparative clause)
- d. Mary read a book over Christmas vacation by Barwise and Perry. (prepositional phrase)
- e. A man sat down next to me on the plane with three copies of *Situations and Attitudes*. (prepositional phrase)
- f. Reviews will appear shortly in all the major linguistics and philosophy journals of that new book we have all been waiting for. (prepositional phrase)
- g. It would be surprising to me, certainly, for him to turn down the job. (clause complement)

(Stucky 1987 : 388)

本稿で扱う(1)のa,b,d,e,fのような構文は、名詞句からの外置(extraposition from NP)と呼ばれ、¹以下のように主語NPからある要素が外置される場合と(以下その要素はSXと表す)、目的語NPからの場合(以下その要素はOXと表す)とがある。

- (2) a. A review will appear shortly of this book.
- b. A woman entered the room who was wearing a fur coat.
- c. The claim was made that world population has already outstripped the food supply.
- (3) a. John read a book yesterday by Chomsky.
- b. John met many people yesterday who were interested in the job.
- c. I heard a rumor yesterday that Mary has flat feet.

従来、SXやOXの付加位置については様々な分析がなされてきた。例えば、Emonds (1976) は外置された要素はすべてVPに付加すると分析しているが、Asakawa (1979) ,Baltin (1978 ; 1981 ; 1987) ,Guéron (1980) ,Guéron and May (1984) ,Barss (1986) ,Gelderen (1985) ,Nakajima (1989) ,Reinhart (1980) ,Terazu (1979) 等ではSXはその先行詞となる名詞句を支配する最小のS(=IP)へ付加し、OXはVPへ付加するという分析がされている。しかし、Culicover and Rochemont (以下C&R) (1990)、Rochemont and Culicover (以下R&C) (1990) では、OXはVPへ付加するという点では他の分析と一致しているが、SXの場合、IP又はVPへ付加するという分析がされている。

そこで、本稿では1節においてこのC&R (1990)、R&C (1990) の提案をとりあげ、その問題点を検討する。2節では、C&R (1990) ,R&C (1990) が提案するCP(Complement Principle) をとりあげて外置された要素の着地点を検討する。3節においては、外置を α 移動の一例と捉えているNakajima (1989) の分析をとりあげ、そこで試みられている束縛理論を枠組みとしたSX、OXの着地点決定の問題点について考察する。4節においては、代案として先行詞統率を枠組みとしたアプローチを試み、その場合のSXとOXの着地点と利点を述べることにする。

1. C&R (1990)、R&C (1990) の分析

1. 1 OXの着地点

外置によって移動された要素の着地点について、まずOXの場合を検討してみよう。

第一にOXがVPへ付加するという証拠は、概ね、ある記号列がVPか否かのテストとして用いられるVP削除 (VP deletion)、VP前置 (VP preposing)、擬似分裂化 (pseudo-clefting) によって裏付けられる。

- (4) a. John met a man last week (who was) from Philadelphia, and
George { met a man last week (who was) from Philadelphia /
did } too.
- b. John said he would meet a man at the party (who was) from
Philadelphia, and meet at the party (who was) from Philadel-
phia he did.
- c. What John did was draw a picture on the wall of his brother.
(C&R 1990 : 28)
- (5) a. John met a man last week (who was) from Philadelphia, and
George (met a man last week / *did) (who was) from New
York.
- b. *John said he would meet a man at the party (who was) from
Philadelphia, and meet a man at the party he did (who was)
from Philadelphia.
- c. *What John did of his brother was draw a picture on the wall.
(C&R 1990 : 28)

つまり、OXを残してVP削除、話題化、擬似分裂化を施すと非文が生じるた

め、OXはVPに付加しているという裏付けが得られる。

第二に、OXがVPに付加しVPよりも上の位置へ付加できないことは、代名詞とその先行詞の指示関係を見ることで予測される。

(6)a. **She*_i told many people about the concert who *Mary*_i made nervous.
(Guéron & May 1984 : 10)

b. **She*_i invited many people to the party that *Mary*_i didn't know.
(C&R 1990 : 28)

(7)a. I sent her_i many gifts last year that *Mary*_i didn't like.

b. *I sent her_i many gifts that *Mary*_i didn't like last year.²
(C&R 1990 : 29)

(6)、(7b)が非文となるのは、束縛理論によると、代名詞と同一指標を持つ指示表現 (Mary) が前者よりも構造上、下の位置にある、つまり代名詞が先行詞をc-commandしているからであると考えられる。代名詞をc-commandするはずの先行詞を含むOXは、(8)のような付加操作に関わる原理に従うと、着地点はVPかIPかに限られるが、もしOXがIPに付加すると考えると、前述の文を誤って文法的と判断してしまうことになる。従って、OXはIPではなくVPへ付加するということが予測できる。

(8)Adjunction is possible only to a maximal projection (hence, X")
that is a nonargument. (Chomsky 1986 : 6)

第三にOXと文副詞との関連を見てみよう。Jackendoff (1972) によると、文副詞は文全体を修飾するためS (=IP)へ付加するということである。ということは、OXをIPへ付加させその文の文法性を判断することによって、OXがIPに付加できるか否かが予測できる。

(9)*John met many people certainly who were interested in the job.

(9)からわかるようにOXがIPに付加すると非文と判断されることから、やはりOXはVPに付加していることがわかる。

1. 2 SXの着地点

OXはVPに付加することを見てきたが、ここではSXの着地点について検討してみよう。前にも述べたように、外置を扱ったほとんどの先行文献においてSXはIPに付加するという分析がなされている。しかし、C&R(1990)、R&C(1990)では、SXはIP又はVPに付加できると提案されている。では、なぜ彼らがSXがVPに付加できると提案するに至ったか、その動機について述べ、問題点を検討してみることにする。

1. 2. 1 SXのVPへの付加

SXの場合はVP削除、VP前置、擬似分裂化のテストによってIPに付加しているという予測ができる。

- (10) a. Many people resigned who disagreed with the government policy
and some also did who agreed with it.
b. *John found a woman in Chicago who went to school with him,
but I couldn't who went to church with me.

(Terazu 1979 : 90)

- (11) a. They said that a man would come in, and come in a man did
who had lived in Boston.
b. *They said that a man would come in who had lived in Boston,
and come in who had lived in Boston a man did.

(C&R 1990 : 36)

- (12) *What many people did was resign who disagreed with the govern-
ment policy.

(Terazu 1979 : 90)

しかし、C&R (1990)、R&C (1990) は第一に、(13)のような例が容認されることから、SXはVPに付加し、VP削除によってVPと共に削除された可能性があると考えている。

- (13) a. A MAN came in with blond hair, and a WOMAN did [e]
TOO.
b. A MAN came in who had lived in Boston, and a WOMAN did
[e] , TOO.
c. Although none of the MEN did [e], several of the WOMEN
went to the concert who were visiting from Boston.

(R&C 1990 : 35)

しかし、ここではむしろ、VPと共にSXが削除されている場合、それはVP削除に伴ってIPに付加しているSXが削除されている、と考える方が妥当であるように思われる。なぜならば、(14)からわかるように、明らかにVPの外にあると考えられる文副詞が、(15)のようにVPとは別に削除される場合があるからである。

- (14) a. Certainly, John will pass the exam.
b. John certainly will pass the exam.
c. John will certainly pass the exam.
d. John will pass the exam, certainly.
e. * John will pass certainly the exam.
(15) a. John certainly will pass the exam, and Mary will, too.
b. John will certainly pass the exam, and Mary will, too.

このように、文副詞が独自に削除されているのと同様、IPに付加しているSXも随伴的に削除できるのではないかという予測ができる。従って、VP削除によって導かれた文において、SXがVPに付加し、そのVPが削除されていると解釈するには無理があるように思える。

次に、C&R (1990) がSXはVPへも付加してよいという動機づけとなった第二のデータを検討してみよう。

- (16) a. Some women came in (who were) from Chicago as quickly as possible.
 b. A man came into the room that Mary recognized as quickly as he could. (C&R 1990 : 33)

彼らはVPを修飾する構成素³の前にSXが現われているこれらの文が容認可能であるとして、SXはVPに付加できると分析する。更に、彼らはSXがその構成素と共にVP削除されている文を提示し、SXのVP付加の可能性を例証できると主張する。^{4,5}

- (17) a. Some women came in (who were) from Chicago as quickly as possible, and some men did too.
 b. A man came into the room that Mary recognized as quickly as possible, and a woman did too. (C&R 1990 : 34)

しかし、この分析にも問題がある。つまり、(16)のSXが仮にVPの内部に付加しているとすれば、それは付加は非項にのみ可能とする(8)の原理に違反し、理論上排除されるからである。また、仮にSXがVPに付加し、VPを修飾する副詞句 (as quickly as possible や as quickly as he could) がSXよりも上のVPの断片に支配されているとすると、(16)と同じ構造を持つと考えられる次の文も、文法的と判断されなければならないが、事実は予測に反している。

- (18) *A man came in with a funny hat stealthily.
 (Nakajima 1990 : 44)

従って、(16)のような文は、マージナルであり、文法的であるとしないうか、

あるいはその副詞句はSXと共に、特別にIPに付加すると考えなければならなくなる。

最後に、C&R (1990) がSXがVPに付加してもよいという動機づけとなった三つ目のデータを検討してみることにする。彼らは、Emonds (1976) の挿入変形 (parenthetical formation) において、文中の挿入文の右側に置かれる要素は構成素を成す連鎖であるということに注目し、SXがVPに付加している証拠として以下の文を提示している。

- (19) a. A man was, I think, sitting in the room who had a scarf on.
b. A man, I think, was sitting in the room who had a scarf on.
c. *A man was sitting, I think, in the room who had a scarf on.
(C & R 1990 : 34)

Emondsの分析では、挿入句の右側は構成素を成していなければならないので、(19a)ではVP、(19b)ではVP又はIPという構成素を成すために容認され、(19c)では構成素を成さないために非文になると考えられる。しかし、Emondsの提案には問題がある。彼の提案では挿入句の右側の要素は共に構成素を成すものに限られるはずであるが、(20)のように事実は予測に反している。

- (20) a. John gave, I believe, Four Roses to his father.
(Emonds 1976 : 47)
b. The captain, who is, I think, our best player, will graduate next year.
(Hooper and Thompson 1973 : 489)

また、以下の文を見てもよう。

- (21) She will, I think, agree with you up to a point, though she didn't agree to your plans as a whole.

譲歩節はIPに付加しているため、⁶ 挿入句の右側の要素はVPと共に構成素を成しているとは言えない。⁷ 従って、C&R (1990) が主張するようにSXが挿入句の右側のVPと共に構成素を成しているとは言い難い。

以上、C&R (1990) がSXがVPに付加してもよいという動機づけとなったデータを取りあげ、その問題点を検討してきたが、いずれのデータもSXがVPに付加するという証拠にはなり得ないように思える。

では、次に外置された要素とその先行詞を関係づけるためにC&R (1990)、R&C (1990) が設けた原理が移動した要素の着地点と関連してくるため、それを取りあげ問題点を検討してみることにする。

2. CP (Complement Principle)

C&R (1990), R&C (1990) は名詞句からの外置を移動現象と見做さず⁸ 外置された要素は基底生成すると考え、表面構造の情報に基づき外置された要素とその先行詞を関係付ける解釈上の操作を制約する原理としてCP (Complement Principle) を提案している。また、この原理が適用されるレベルはSSとされている。

2. 1 CPの問題点

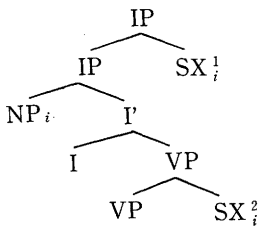
このCPには二種類あり、一つはR&C (1990)、もう一つはC&R (1990) の提案するCPである。しかし、両者とも統率の定義は違っているものの内容は同じであるので、ここではC&R (1990) の提案するCPを取りあげる。

- (22) Complement Principle : β is a potential complement of α ($\alpha, \beta = X^{\max}$), only if α and β are in a government relation.
- (23) Government⁹ : α governs β if α c-commands β and there is no δ , δ a barrier for β , that excludes α .
- (24) C-command : α c-commands β iff α does not dominate β and there is no δ that dominates α and not β .

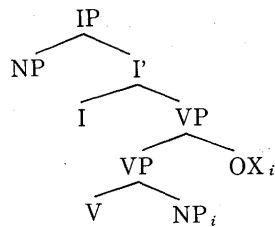
- (25) Barrier : δ is a barrier for β iff (i) δ is an $X^{\max}$ that dominates β and (ii) δ is not θ -governed (directly θ -marked).
- (26) Exclusion : δ (δ is $X^{\max}$) excludes α if no segment¹⁰ of δ dominates α .
- (27) Domination : δ ($\delta = X^{\max}$) dominates α only if every segment of δ contains α .

では、このCPに従ってSXとOXの位置を考察してみよう。

(28) a. SXの位置



b. OXの位置



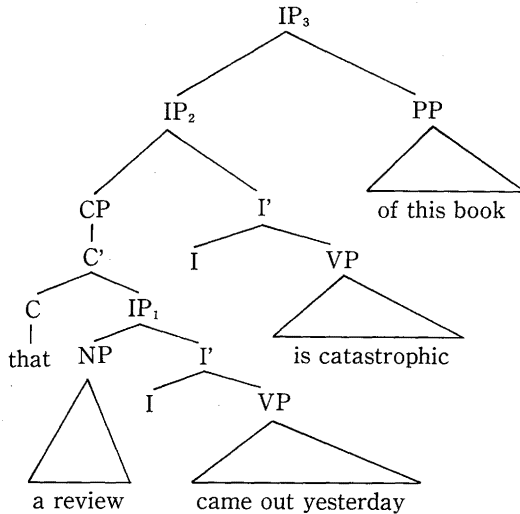
まず、OXの場合を見てみよう。VPは本来Iに θ 統率されているが、L標示されないために阻止範疇となり、VPが支配する要素に対して障壁となる。しかし、 OX_i はVPの断片の一つに支配され、 NP_i はVPのすべての断片に支配されている。従って、VPは OX_i 、 NP_i を排斥しない。障壁は排斥関係にある二つの要素間にのみ適用されるので、 OX_i と NP_i の間には障壁が存在しないことになる。更に、 OX_i は NP_i をc-commandしているためCPが守られ両者が関係付けられる。しかし、 OX_i がIPに付加した場合、 OX_i は NP_i をc-commandし、VPは NP_i を支配してはいるものの、 OX_i はVPの断片に支配されずVPにより排斥される。従って、 OX_i と NP_i の間に障壁VPが介在しCPを破るため、 OX_i はIPに付加できないことになる。

次に、SXの着地点を見てみよう。SXがIPへ付加した場合、 SX_i^1 は NP_i をc-commandする。IPは SX_i^1 がIPの断片に支配されているのでそれを排斥しない。従って、両者の間に障壁が介在せず統率関係が成立し、CPが守られる。一方、C&R (1990) の主張に従ってSXがVPに付加した場合、 NP_i はSX

2_i をc-commandする。SX 2_i はVPのすべての断片に支配されているわけではないので、VPには支配されているとは言えない。それで、NP $_i$ とSX 2_i の間には障壁が介在しないので統率関係が成立し、CPが守られる。それゆえ、SXはVPに付加することが認可される。

また、CPは以下のような文も排除することができる。

(29)a. *That a review came out yesterday is catastrophic of this book.



外置されたPPはNPをc-commandしている。しかし、NPはIP $_1$ 、CPに支配され、PPはそれらによって排斥されている。CPが支配するIP $_1$ はCが語彙範疇でないためL標示されず阻止範疇となる。しかし、CPが障壁性を引き継ぎCPがNPに対する障壁となる。従って、NPとPPの間に障壁が介在することになり統率関係が成立せずCPを破るために(29)の文は非文となる。¹¹

R&C(1990)はCPはSSで適用されると仮定するが、先行詞が数量語句を含むか含まないかで異なったレベルで適用されるとしている。数量詞句を先行詞が含む場合LFで適用され、含まない場合SSで適用されるということである。LFで適用されるとすると、数量詞句は数量詞繰り上げ (quantifier

raising) される。では、以下の文を検討してみよう。

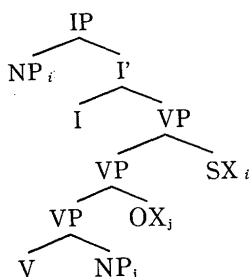
- (30) Someone bought many beans to the party yesterday [that should have been cooked] [who we didn't know] .

OX

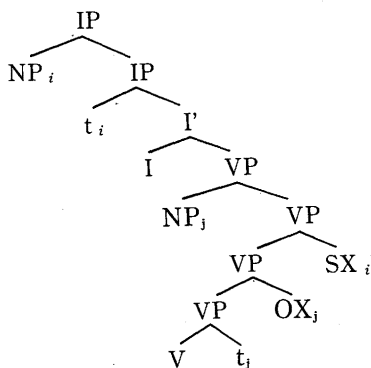
SX

この文はそれぞれの先行詞との関係が入れ子型になっており、R&C (1990) の Interpretive Nesting Requirement に従っているので文法的と判断される。¹²ところでKoopman & Sportiche (1982) やMay (1985) は数量詞句はVPへも付加が可能であるとしている。¹³ この分析を採用すると(30)のような文のSSとLFの略図は以下のようなになる。

- (31) a. SS



- b. LF



(31b)において、 NP_i は t_i を局所的に束縛し、 NP_j は t_j を局所的に束縛している。ところで、CPがLFで適用されるとすると NP_i と SX_i は NP_j が間に介在するため統率関係が成立しない。また、 NP_j と OX_j は SX_i が間に介在するためやはり統率関係が成立しない。従って、CP違反が生じ、(30)の文を誤って非文と判断してしまうことになる。¹⁴そこで、これを回避するためには、 SX_i はIPに付加していなければならない。C&R (1990)、R&C (1990) はSXはVPに付加してもよいと主張するが、結果的に、CPにより外置された要素と先行詞との適正解釈を得るためにも、そうした二者択一の選択を許すより、SXはSSの段階でIPに付加すると考える方が妥当であろう。

以上、C&R、R&Cの提案するCPの適用例や問題点を検討し、SXはやはりIPに付加するのが妥当であることを述べてきた。では、次に外置を統語的移动と考える分析のうちでNakajima (1989) の分析をとりあげ外置の移動要素の着地点を検討する。

3. 束縛理論によるアプローチ

3. 1 束縛原理 (A)

Nakajima (1984 ; 1989) では右方移動によって残される痕跡 (RM痕跡) を照応形であると仮定し、それゆえRM痕跡は束縛原理 (A) に従い、以下のような束縛範疇内で束縛されるとした。

(32) β is a binding category for α if and only if β is the minimal category containing α and a SUBJECT accessible to α .

(Chomsky 1981 : 220)

こうした分析により以下のような指定主語の条件 (specified subject condition) の効果が説明できる。

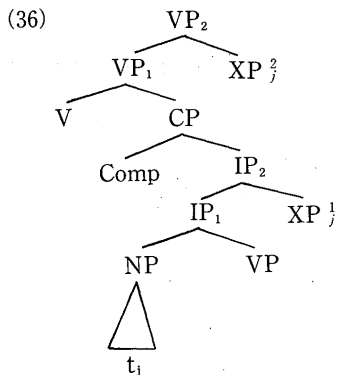
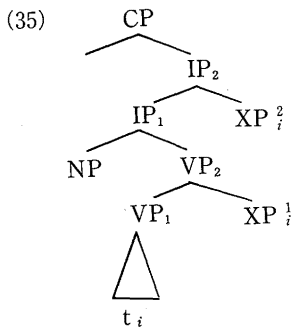
- (33) a. [_{IP} I bought [a book t] yesterday about French cooking] .
 b. *I bought [_{NP} John's book t] yesterday about French cooking.

実際(33a)のRM痕跡の束縛範疇はIPになり、その中でRM痕跡は先行詞 about French cookingに束縛されている。しかし、(33b)では、痕跡の束縛範疇は(接近可能な主語John'sを含む) 目的語NPであり、痕跡は先行詞に束縛されず原理(A)違反を起こしている。

従って、外置された要素は(34)の原理に従って自由に非項に付加できるが、束縛原理(A)によりその着地点が決定される。

- (34) Adjunction is possible only to a maximal projection (hence, X")
that is a nonargument. ((8)を再録)

では、束縛理論によってどのように着地点が決定されるのかを見てみよう。



(35)で目的語NPからの外置の場合、 XP_i は(34)の原理に従ってVPかIPに付加する。 XP_i がVPに付加した場合、 t_i の束縛範疇は IP_1 となり、 t_i はその束縛範疇内で XP_i に束縛され原理(A)を満たす。一方、 XP_i がIPに付加した場合、 t_i の束縛範疇はやはり IP_1 で、途中で t_i は XP_i によって束縛されない。というのは、 XP_i は最小の範疇IP内にあると考えられるが、May (1985)の支配の定義、つまり、AはBのすべての断片(segment)に支配されているときに限りBに支配されるという定義に従えば、IPに付加した XP_i はIPに支配されず、束縛範疇外にあることになるので原理(A)の違反を起こすからである。原理(A)を満たすにはやはり、 XP_i はVPに付加する以外にない。また、主語NPからの外置に関する(36)において、Nakajima (1984), Koster (1984; 1986)の仮定に従うと、Compが t_j に対して接近可能な主語になるので、束縛範疇はCPになり、 t_j は XP_j によって束縛されるが XP_j によって束縛されることはない。従って、OXはVPへ、SXはIP付加するということが原理(A)の帰結として説明できる。

3. 2 束縛範疇に関する問題

しかし、この原理(A)を枠組みとしたアプローチには問題がある。つまり、OXの位置は原理(A)によりVPに付加することが予測できるが、主語NPからの外置の場合、SXはIPだけでなく、他の非項に付加するといった問題が生じる。というのは、Compを接近可能な主語と見做せばthatもそれに含まれることになり、そうすると架橋動詞 (bridge verb) の補文のCompに入るthatの存在は随意的であるからSSの段階で挿入されていない場合、接近可能な主語が存在しなくなり、痕跡の束縛範疇は動詞の補文であるCPを越えてしまうことになるからである。¹⁵ 例えば(36)のVが架橋動詞であれば、thatの挿入が随意的であるため、¹⁶ t_i の接近可能な主語がなくなり、もはやCPは束縛範疇とはならない。従って、主文が t_i の束縛範疇となり、 XP_j は(34)の原理に従って VP_2 に付加することも可能になる。

4. 先行詞統率によるアプローチ

ここでは代案として先行詞統率によるアプローチを導入することにする。

4. 1 先行詞統率

外置によって名詞句から移動した要素が痕跡を残すと考えたと、その痕跡の位置は二通り考えられる。一つは付加部で、もう一つはNの補部である。付加部は言うまでもなくNに θ 統率されないが、補部は θ 統率される。

ところで、Stowell (1981 ; 1982) によると、補文が適正統率されているならばその主要部のCOMPも適正統率され、適正統率されていない位置に補文がある場合COMPが空のままであればECPに違反するためthatが挿入されるということである。ということは、動詞の補部のCOMPへのthatの挿入は随意的であるが、Nの補部のCPのCOMPにはthatが義務的に挿入されるためNはそのCPを適正統率していないのではないかという予測ができそうであ

る。

- (37) a. the claim * (that) world population has already outstripped the
food supply
b. David believes (that) the children are geniuses.

更に、Rizzi (1990) では [+V] の要素によって直接セレクトされない範疇は統率の障壁になると分析されている。Nは [+V] の素性を持っていない。ということは、この分析に従えば、NはもはやLマークできないということになる。¹⁷ NはVのようにLマークできないとすると、必然的に語彙統率できなくなり、従って、Nの補部も付加部と同様Nによって統率されないこととなる。

以上のことから、ECP違反を引き起こさないためには外置によって残された痕跡は、先行詞統率されなければならないという必要性が出てくる。¹⁸

ところで、NPはNakajima (1989) で採られているDP分析¹⁹を採用すれば次のような構造をもつことになる。DP分析によれば、DPは項であり、DPに埋め込まれたNPは以下の文からわかるように非項であり付加を許す。

- (38) a. [[[A reiew t] in LI] of John's new book] was read.
b. [_{DP} A [_{NP} [_{N'} review t] in LI] of John's new book]] ...

DPはIPと類似しているため固有障壁 (inherent barrier) でも最小障壁 (minimality barrier) でもないと仮定すると、(39)のように、NPの下にあったCPはNPに付加し、それからIPに付加していく。²⁰

- (39) [_{IP} [_{IP} [_{DP} A [_{NP} [_{NP} book t] t']] appeared [_{CP} which John wrote]]] .

また、CP、t'、tは一つの連鎖を形成し、この連鎖においてCPはt'を、t'はtを先行詞統率する。従って、tはCPに先行詞統率されることになる。²¹

4. 2 着地点

では、外置された要素の着地点を先行詞統率を枠組みとして検討してみる。ただし、先行詞統率の定義は以下のようなRizzi (1990) で採られている定義を採用する。

(40) Antecedent Government : X antecedent-governs Y iff

- (i) X and Y are coindexed
- (ii) X c-commands Y
- (iii) no barrier intervenes
- (iv) Relativized Minimality is respected.

SXがIPに付加した場合、SXは痕跡をc-commandし、間に障壁が介在しないので先行詞統率が成立するが、VPに付加した場合、SXは痕跡をc-commandできない。従って、SXはIPに付加するということが先行詞統率の帰結として説明できる。一方、OXがVPに付加した場合、OXは痕跡をc-commandし、VPはOXを排斥しないので間に障壁が介在せず先行詞統率が成立する。しかし、OXがIPに付加するとOXは痕跡をc-commandするが、その場合VPはOXを排斥しているのでVPが障壁になり先行詞統率が成立しない。結果的にSXの着地点はIP、OXの着地点はVPであることが説明できる。²²

更に、先行詞統率を枠組みとする利点としては、従来の下接の条件 (sub-jacency condition) を導入せずとも、以下のように深く埋め込まれた要素が外置される場合の文法性の判断も可能になる。

(41) a. * [Many proofs [_{PP} of [the theorem t]]] appeared
[that I wanted to think about].

b. *John attended [the opening [_{PP} of [a collection t]]] this morning [of exciting new artgalleries].

つまり、こうした文が非文法的と予測されるのは、PPがLマークされず障壁となり先行詞統率が阻止されているからであると考えられる。

5. 結び

本稿では、SXとOXの着地点について考察してきた。C&R (1990)、R&C (1990)ではSXはIP又はVPへ付加が可能であると分析されているが、彼らがそう提案するに至った一連のデータには問題があり、SXがVPへ付加できるという決定的証拠とはならない。また、外置された要素とその先行詞との関係付けをするCPを枠組みとするにしても、SXがVPに付加すると問題が生じるため、それはIPへ付加するのが妥当である。束縛理論によるアプローチには若干の問題があったが、先行詞統率を枠組とすればSXとOXの着地点はそれぞれIP、VPになることが予測され、更にCPや下接の条件に代わって、外置構文の文法性の判断も可能となる。

註

- * 本稿をまとめるにあたり、貴重な助言を戴いた稲田俊明先生に感謝の意を表したい。
- 1 Ross (1967) は名詞句から関係詞節、又は同格節を外置させたものはextraposition from NPと呼び、前置詞句の場合extraposition of prepositional phraseと呼んでいる。本稿ではこの両者をまとめて名詞句からの外置と呼ぶことにする。
- 2 Larson (1987) はBarss and Lasnik (1986) の提案に基づいて、二重目的語構文の構造 $[V NP_2 NP_1]$ において NP_2 は NP_1 を非対称的にc-commandし、与格構文の構造 $[V NP_1 P NP_2]$ において NP_1 は非対称に NP_2 をc-commandすると分析している。他に、Aoun & Li (1989) 等参照。
- 3 ここではas quickly as possibleを指すことになる。この句が動詞を修飾していることは以下のようなVP削除、VP前置、逆行照応の例からわかる。

(i) a. Mary came into the room as quickly as possible, and John did too.

b. They asked him to come into the room as quickly as possible, and come into the room as quickly as possible he did.

- c. *He_i came into the room as quickly as John_i could.

(C&R 1990 : 33)

- 4 線的にはVP内にあると思われるものが、VP削除を受けない場合がある。

(i) a. John talked, of course, about politics, and Mary did too. (=Mary talked about politics too ; ≠ Mary talked too ; ≠Mary talked, of course, about politics too)

b. *John talked, of course, about politics, and Mary did, you'll be surprised to hear, about baseball. (by deletion of *talk*)

c. John talked, of course, about politics, and Mary, you'll be surprised to hear, did too. (= and Mary, you'll be surprised to hear, talked about politics too ; ≠ and Mary, you'll be surprised to hear, talked, of course, about politics too)

(McCawley 1982 : 96)

この例からわかるように、McCawleyは挿入された句はVPには含まれないと分析している。Safir (1986) は(i)のようなVP削除は、Sag (1976) ,Williams (1977) , May (1985) が指摘するようにLFで適用されると考え、また、挿入句はChomsky (1986) の完全解釈の原理 (full interpretation principle) に従ってLF'のレベルでVPに付加すると考えている。McCawleyの分析では、挿入句はSに支配されているが、Safirの分析では、挿入句はどの節点にも支配されていない。どちらの分析を採用にしても挿入句はVPに支配されていない。

- 5 もし仮に、(16)の文のSXが線的にVP内にあるとすると、それはVP削除の対象とならず、従って、SXはVPに付加しているという帰結は導き出せないことになる。
- 6 他にIPに付加する副詞節には「対比」を表すwhereas,while,「結果」を表すso that,「理由」を表すforなどによって導かれた副詞節が考えられる。
- 7 Emondsは構造保持制約に基づき、外置された要素はすべてVPに付加すると考えた。しかし、結果節の外置を見てみると必ずしもそれがVPに付加するとは限らない。

(i) a. She_i told so many people about the concert that Mary_i made Bill nervous.

b. I was afraid that so many people would show up that we wouldn't have enough room,* and show up that we didn't have enough room so many people did.

Guéron & May (1984) では結果節はSXとは異なり、SではなくS'に付加すると分析している。どちらにせよ、Emondsの分析には問題がある。なお文主語の外置における

移動要素の着地点はVPであるとされるが、詳しくはGelderen (1985) 参照。

- 8 彼らと同じアプローチを試みているものとしては、Guéron (1980) ,Guéron & May (1984) がある。また、Chomsky (1981 ; 1986) は外置は統語的制約を受けず、PFでの文法規則によって派生すると考えている。統語的制約を受けると考えるアプローチには、Baltin (1981 ; 1983 ; 1984) Nakajima (1989) 等がある。
- 9 R&C (1990) では、統率は以下のように定義されている。

(i) α governs β iff α c-commands β and for every γ ($\gamma = X^{\text{MAX}}$) that dominates β and excludes α , either

(i) $\beta = \gamma^0$, or

(ii) $\beta = \text{SPEC}, \gamma$, or

(iii) there exists a segment of γ that does not dominate β .

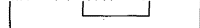
- 10 断片 (segment) についてはChomsky (1986) 参照。
- 11 しかし、CPには以下のような文を排除することができないという問題点がある。

(i) *By Chomsky, a book appeared t.

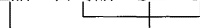
By Chomskyは移動によりIPに付加し、そしてa bookをc-commandしている。また、By ChomskyがIPに付加していることから両者の間に障壁は介在しないことになる。従って、CP違反は起らず、この文は文法的と判断されなければならない。しかし、彼らの説明によると、(i)の文が非文となるのは外置された要素 (by Chomsky) が話題化されているためであるとされているが、なぜ外置された要素を話題化すると非文となるかは説明されていない。彼らの採る外置された要素と先行詞とを関連付ける解釈原理によるアプローチには、(i)のような文は直接的に排除できないという問題点があるが、外置構文は統語的制約を受けるという立場を採れば、外置はそもそも右方移動であるので、外置された要素は先行詞よりも左に移動することはなく、それに反している (i) は非文であると考えられるかもしれない。

- 12 R&C (1990) によると、次のように外置された要素と先行詞が入れ子型になっていればその文は容認されるが、そうでない場合は容認されないとしている。

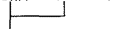
(i) a. 主語…目的語…OX…SX



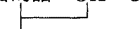
b. *主語…目的語…SX…OX



c. 主語…SX…SX



d. 目的語…OX…OX



しかし、Nakajima (1992) では以下のように入れ子型になっている文が非文法的と判断されている。

- (ii) *He donated many books to a library last year [which is famous for a rich collection of scientific books] [that he had inherited from his grandfather].

- 13 Koopman and Sportiche (1982) によると、数量詞句のVP付加の利点としては、次の(i)のようにeveryoneが広い作用域を持つとすると、everyoneが he_i と t_i を同時に局所束縛(local binding)するため、一対一対応の原理(bijection principle)に違反することになるが、(ii)のようにsomeone he metがIPではなくVPに付加されるならば、everyoneは t_i だけを局所的に束縛し、 he_i を局所的に縛るのは t_i であるので一対一対応の原理に違反することはないということである。

(i) [_{IP} Everyone_i [_{IP} [someone he_i met]_j [_{IP} [_{t_j} likes _{t_j}]]] .

(ii) [_{IP} Everyone_i [_{IP} _{t_i} [_{VP} [someone he_j met]_j [_{VP} likes _{t_j}]]]] .

- 14 LFにおいて、CP違反を引き起こさないために、 SX_i をIPへ付加し直す操作が必要であると仮定すれば、この操作はChomsky (1989 ; 1991) で主張する最小労力(least effort principle)により排除されることとなるであろう。最小労力の原理は文法の余剰性を極力排除しようとするもので、表示の中に適切な解釈を受けない無用な要素が生じるのを禁じる完全解釈の原理(full interpretation principle)と、不必要な派生を禁じる最後の手段の原理(last resort principle)で成っているが、ここで関わってくるのはこの最後の手段である。この原理により、そのLFでの不必要な派生が排除されるという事態を引き起こさないためには、最初からSSで SX_i をIPに付加させておくのが、CPにより適正解釈をうけるための手段であろう。
- 15 しかし、動詞が非架橋動詞であればCompにはthatがDSで義務的に挿入されるため、 t_i の束縛範囲はCPに限定される。
- 16 SSでthat挿入がされなかった場合、PFで挿入されると考えられるが、ここでの挿入も随意的である。
- 17 Kayne (1981) ではN又はAは適正統率子にならないと分析され、他に、Cinque (1990) ではNはLマーカーとして適格性を欠くと分析されている。
- 18 Rizzi (1990) で提案されているように、ECPの定義として語彙統率と先行詞統率の両方を満たすべきとする接合的(conjunctive)解釈を採用することもできる。(37)のthatの分布は見直さなければならないが、以下の議論は変わらない。また、外置の場合の先行詞が痕跡に後続するのは、他の先行詞統率と異なるが、このECPの接合的解釈を用いればより自然なものになるかもしれない。
- 19 Abney (1987) 参照。
- 20 ここで問題となるのは(i)のような左方移動に関わる主語条件(subject condition)で

ある。

(i)* [_{CP} What did [_{IP} [_{DP} a [_{book} [_{PP} about t]]] appear]]?

この文と(39)の違いは(i)のIPは付加構造ではなく継承によって障壁を形成する点にある。一つの障壁では、下接の条件によりwhatの移動を阻止できないが、以下の文と比較するとNPの深く埋め込まれたPPは深く埋め込まれたIPのように(弱い)障壁となるため、(i)のwhatの移動はPPとIPの二つの障壁を越えているので容認されないと説明されている。

(ii)? [_{CP} About what did [_{IP} [_{DP} a [_{NP} book t]] appear]]?

- 21 Lasnik and Saito (1984) の分析に従えば、中間痕跡のtはSSでtに認可 (license) を与えたら、LFではECPに関係なくなるのでLFの段階で削除しても構わないことになる。

- 22 次の文の文法性も先行詞統率によって判断できる。

(i) a. A man came into the room last night [that I just finished painting]
[who had blond hair] .

b. *A man came into the room last night [who had blond hair] [that I
had just finished painting] .

参考文献

- Abney, S.P. (1987) , "The English noun phrase in its sentential aspect." Ph. D. dissertation, MIT.
- Aoun, J. and Y. A. Li (1989) , "Scope and constituency," *LI* 20, 141-172.
- Asakawa, T. (1979) , "Where does the extraposed element move to ?" *LI* 10, 505-508.
- Baltin, M. (1978) , "Toward a theory of movement rules." Ph. D. dissertation, MIT.
- (1981) , "Strict bounding," in C.L. Baker—John McCarthy, eds., *The Logical Problem of Language Acquisition*, 257-298, MIT.
- (1983) , "Extraposition : bounding versus government—binding," *LI* 14, 155-162
- (1984) , "Extraposition rules and discontinuous constituents," *LI* 15, 157-163
- (1987) , "Do antecedent—contained deletions exist ?" *LI* 18, 579-596.
- Barss, A. (1986) , "Chains and anaphoric dependence : on reconstruction and its implications." Ph. D. dissertation, MIT.
- and H. Lasnik (1986) , "A note on anaphora and double objects," *LI* 17, 347-354.
- Chomsky, N. (1981) , *Lecture on Government and Binding*. Dordrecht : Foris.
- (1982) , *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and*

- Binding*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- (1986) ,*Barriers*. Cambridge, Mass : MIT Press.
 - (1989) ,“Some notes on economy of derivation and representation,” MIT working Papers in Linguistics10,43-74.
 - (1991) ,“Some notes on economy of derivation and representation,”in Freiden eds. *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. MIT. 417-454.
- Cinque, G. (1990) ,*Types of $\bar{A}$ -Dependencies*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Culicover, P. and M. Rochemont (1990) ,“Extraposition and the complement principle,” *LI*21,23-47.
- Emonds, J. (1976) ,*A Transformational Approach to English Syntax : Root, Structure—Preserving, and Local Transformations*. New York : Academic Press.
- (1979) ,“Appositive relatives have no properties,” *LI*10,211-243.
- Gelderen, E. Van (1985) ,“Adjunction and (i)t,” *TLR* 5,137-152.
- Guéron, J. (1980) “On the syntax and semantics of PP extraposition,” *LI*11,637-678.
- and R. May (1984) ,“Extraposition and logical form,” *LI*15,1-31.
- Hooper, J. B. and S. A. Tompson (1973) ,“On the applicability of root transformations,” *LI* 4,465-497.
- Jackendoff, R. (1972) ,*Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Kayne, R. (1981) ,“ECP extentions,” *LI*12,93-133.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1982) ,“Variable and the bijection principle,” *TLR* 2,139-160.
- Koster, J. (1984) ,“On binding and control,” *LI*15,417-459.
- (1986) ,*Domains and Dynasties*. Foris, Dordrecht.
- Larson, R. (1987) ,“On the double object construction,” in *Lexicon Project Working Papers*16, Center for Cognitive Science, MIT.
- Lasnik, H. and M. Saito (1984) ,“On the nature of proper government,” *LI*15,235-289.
- May, R. (1985) ,*Logical Form : Its structure and Derivation*. Cambridge, Mass : MIT Press.
- McCawley, J. D. (1982) ,“Parentheticals and discontinuous constituent structure,” *LI*13,91-106.
- Nakajima, H. (1984) ,“Comp as a subject,” *TLR* 4,121-152.
- (1989) , “Bounding of rightward movements,” *LI*20,328-334.

- (1990) ,“Against the interpretive nesting requirement,” *Metropolitan Linguistics* 10, 40-54.
 - (1992) ,“Another type of antecedent government,” *LI* 23, 313-328.
- Reinhart, T. (1980) ,“On the position of extraposed clauses,” *LI* 11, 621-624.
- Rizzi, L. (1990) , *Relativized Minimality*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Rochemont, M. and P. Culicover (1990) , *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press.
- Ross, J. R. (1967) ,“Constraints on variables in syntax.” Ph. D. dissertation, MIT.
- Safir, K. (1986) ,“Relative clauses in theory of binding and levels,” *LI* 17, 663-689.
- Sag, I. A. (1976) ,“Deletion and logical form.” Ph. D. dissertation, MIT.
- Stowell, T. (1981) ,“Origins of phrase structure. ” Ph. D. dissertation, MIT.
- (1982) ,“The tense of infinitives,” *LI* 13, 561-570.
- Stucky, S. U. (1987) ,“Configurational variation in English : a study of extraposition and related matters,” *Syntax and Semantics* 20, 377-405.
- Terazu, N. (1979) ,“A note on the derived structure of extraposition rules,” *SEL* 7, 86-99.
- Williams, E. (1977) , “Discourse and logical form,” *LI* 8, 101-139.